

小中学校での防災教育の重要性とその対策の提案

増田俊明（静岡大学）

「小中学校での防災教育が重要である」ということに対しては、説明は省略します。また、「ほとんどの人が現在の防災教育が完璧である」と思っていない事も前提としています。

小中学校での防災教育用の教材は既にできあがっていると聞いております。その教材を使いこなせる教員が不足している、とも聞いております。自発的に各教員が勉強するのを待っているのは得策ではないと思います。たぶん小中学校の先生たちは非常に忙しくて、余裕が無いからです。そこで、防災に強い先生を作るためのシステムをしっかりとすべきだと考えます。

小中学校の先生に防災に強くなってもらう方法を3つ提案し、問題点も紹介します。実行できるか検討してみる価値はあると思います。

- (1) 教員採用時：防災をしっかり勉強した者を優先的に教員に採用する方法
- (2) 現職教員にサバティカル（＝リフレッシュタイム）：例えば半年、大学に通って防災（等）の勉強ができるシステムの構築
- (3) 定年退職直後の元教員：もう一度大学などへ行き、防災の勉強をした後で学校現場に再登場

問題点

- (1) を静岡県の方針として採用し広報すれば、教員志望の大学生は、こぞって防災の勉強をし、教員の防災意識は一気に向上するはず。このような独善的な（？）広報が県にできるかどうか問題。発表するだけだから予算は不要。
 - 解決策の例：「防災を優先するのはケシカラン」という非難が発生した場合に、知事・教育委員長は腹をくくって、開き直る。
 - 蛇足：公務員試験で同じ事をやれば、公務員の防災意識を一挙に向上させることができるはず。一考の価値があるソフトな方法論？
- (2) は、現職の先生が時間を作れるかどうかが大問題。現場から離脱する教員を出す事になるので、その教員の穴埋めが必要になり、予算問題が発生する。
 - 解決策の例：予算に応じてサバティカルの人数を決める。
 - 強引な解決策：離脱教員の穴埋めをしない。周辺教員の理解・応援で乗り切る。
- (3) は、教科を教えない教員という新たな人事枠を作る必要があり、予算問題が生じる。このような定年後の再学習・再雇用を希望する優秀な定年退職教員がいるかどうか大問題。
 - 希望者問題の解決策の例：魅力的な条件を付けて勧誘する。例えば実務の軽減（週3日労働など）とか、特別な名誉（例えば知事が感謝状贈呈？）。